

# 新発見の『諸算記』寛永版

鈴木久男

かつて私は、亀井算を載せた現存本としてつぎの資料を紹介したことがある。<sup>①</sup>

## 1 序文 新編諸算記

右此諸算記者為少智拙算于新書記者也

卷末 摂州大坂 川崎屋忠兵衛

明暦元年乙未 九月吉日 重直花押

東北大学蔵

## 2 目録 志んゑんさんき 上巻

卷末 新編亀井諸算記

右之本三卷ニ而出来

明暦三歳十月吉日

田中文内梓行

新発見の『諸算記』寛永版（鈴木）

東北大学、日本大学

3 卷末 新板亀井諸算記

右之本三卷ニ而出来

明暦三歳十月吉日

山田市郎兵衛板

早大小倉文庫蔵

いづれも実見したもので、3はトモエ算盤株式会社にもある。（旧高井計之助氏蔵）

神田 茂は「和算曆学史ノート」と題する手記を筆者に送ってきたが、その一九六一年十月二三日分に、つぎの書を追加された。便宜上3につづけて番号を付しておく。

4 表題 新板亀井□ 上中下三卷合冊

目次 しんへんさんき

卷末 新板亀井諸算記

明暦三歳十月吉日

田中文内梓行

京都大学河合十太郎旧蔵②

筆写本 学士院蔵

5 小倉文庫蔵本3の卷三、小倉文庫蔵

6 小倉文庫蔵本3と同じものの巻三 日本学士院蔵

7 新へんさん記 上中下合冊 下巻末少し欠 東京理科大学蔵<sup>③</sup>

8 中巻 旧高井氏蔵本 故神田茂蔵<sup>④</sup>

最近下平和夫（国士館大学教養部）から送られたコピーにより、

9 題簽 当流かめいさん 下 旧高井氏蔵書

巻末は3と同じく「新板亀井諸算記」。

10 新編諸算記 上巻 故浅井新之助蔵（明暦元年と思われるもの）

の存在を知った。この外、早川武氏も端本を所有されているという。

昨年十月五日、中部日本珠算連盟主催の創立四十周年記念講演会に招かれた私は、講演終了後の晩餐会で理事長から一冊の写真版復刻本の贈与を受けた（次頁写真下）。

柱 下巻

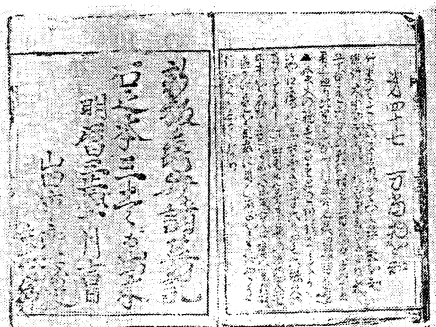
巻末 右此諸算記者為少智拙算

于新書記者也

撰州大坂川崎屋忠兵衛

寛永拾八年辛巳九月吉日 正次花押

で、明治以降誰もがその存在を知らなかった亀井算の書であった。



明暦3年版の諸算記（下平氏蔵）



新発見の『諸算記』寛永18年版

## 亀井算の史料

ここで、亀井算についての文献を年代順に明らかにしておこう。

1 榎並和澄「参両録」承応二年（一六五三）初版、寛文四年（一六六四）再刊<sup>⑤</sup>、

“……爰にかめ井算といふ無類の術ありとて近年全部三冊の書にあらはせしよし、人のかたりければ、何たる人の作れるにやと、道の奥儀ゆかしくて其書をかりもとめてみ侍りしに、更にかのさうまくりにかわらざること興さめて覚ゆれ……”

がある。

2 山田正重「改算記」万治二年（一六五九）

序文に、

“夫世間に行るる塵劫記といふ算書を見るに、事わづらはしく相違のみ多し、其後亀井諸算、参両録等の諸書も木にちりはめ梓に録す云云”

“かめ井割は九々引そろばんといふて、むかしより有、当代の人のつくるにあらず、此算あしきゆへ、今八算見一を用る間、是よりのせず”

と記している。

3 山本格安「遺塵算法」寛保二年（一七四二）

本国印行算書目に

新発見の『諸算記』寛永版（鈴木）

新発見の『諸算記』寛永版（鈴木）

亀井算記 一卷 百川氏

4 古川氏一「算話隨筆」 文化八年（一八一二）以後？

新編諸算記 寛永年中 百川正次著

かけさんはいつれもおなし事なればみぢかきかたをひたりにそおく

参両録中之巻 寛文年中 榎並和澄著

くゝみてもそこからすまぬ玉の法五六二五りし水にあらねと……云云

5 石黒信由集訂 開板算法書籍目録

亀井算 三冊 大阪 百川忠兵衛

此書ハ乗除平方立方マテヲ書ス

6 福田理軒「算法玉手箱」（一八七九）

亀井算 三卷 正保二年 佐渡 百川忠兵衛

と記している。

7 川北朝郷「本朝算家小伝」（一八九〇）

亀井津平、<sup>⑦</sup>越後古町ノ人、亀井算記、三卷 正保二年（一六四五）ヲ著ス……

8 遠藤利貞「大日本数学史」（一八九六）

寛永年間……百川正次が新編諸算記ノ著アリ。……百川正次治兵衛ト称ス。京師ノ人ナリ（或ハ曰ク、大阪人ナリト。其説一定セズ）寛永年ノ末ニ新編諸算記ヲ著ハシタリ。……憶フニ新編諸算記ハ正保年間ノ著ナラム。余未ダ本

書ヲ見ズ、姑ク先者ノ言ニ從フノミ。

正保二年、百川正次、亀井算二卷ヲ著ハセリ。是ヨリ該術ヲ名ケテ亀井算ト謂フ、頗ル北国ニ行ハル。百川正次治兵衛ト称ス。曾テ得タル所ノ商除法ヲ記載シテ之ヲ門弟子ニ教フ。而シテ乘法ニ至リテハ、重能ガ流ニ依レリ。<sup>⑧</sup>所謂百川流是ナリ。是ノ算法、之ヲ亀井算ト云フ。或ハ伝ウ、亀井算ハ大橋某（宅清カ）ガ撰ブ所ノ法ナリト。後人ノ説一定セズト雖ドモ、其流祖ノ百川正次ナリシコト、確定シテ異説ナシ。

#### 9 林鶴一「和算研究集録」（一九三七）

百川正次、忠兵衛トアリ又治兵衛トイハル。異説アリ。京都ノ人ナリトモ又大阪ノ人ナリトモイハル。ソノ著ハストコロノ新編諸算記三冊ハ又亀井諸算記ノ名アリ。寛永年間ノ作ナリトモ、又正保年間ノ作ナリトモイハル。……石黒信由ノ算法書籍目録ニハ、百川忠兵衛ノ書トシテ正保二年亀井算二卷アリ。

#### 10 三上義夫「亀井算攷」（一九三八）

長い論文なので、亀井算の書について要約してみる。

「寛永年中並に正保二年に「新編諸算記」若くは「亀井諸算記」略して「亀井算」と呼ばれる算書が刊行されたと云う事であり、現存の明暦三年版の「新編算記」又は「新版亀井諸算記」の前身であつたらう。現存本には著者名並に刊刻地の記載はないが、元と大阪百川忠兵衛又は百川正次編であつたらしい。<sup>⑨</sup>」

此の百川忠兵衛又正次は、佐渡に居つた百川治兵衛と別人ではあるまい。〃

以上のほか、専門家の発言以外に、

#### 11 その他「日本古典全集」へ古代数学集 上ノの解題に、

新発見の『諸算記』寛永版（鈴木）

「諸勘分物の著者百川治兵衛は佐渡国の人、京都に出て数学を教へた。その学派を世に百川流と云ひ、その算木に由る商除法を亀井算と称する。著述に諸勘分物一卷と亀井算二巻とが有る。後者は正保二年に印行せられたが、今は希覯書である。」

があつた。

以上が戦前の研究である。

### 諸算記は寛永年間に出版された

古川氏一が「算話隨筆」で述べたように、今回新発見された、「諸算記」寛永十八年には正次とあり花押がある。下巻のみであるから、上巻、中巻がどんなであつたかわからないし、正保二年の版本も現存しないから、正保版と校合することも出来ない。

ただ、明暦元年版は現存しているから、新発見の寛永十八年本と巻末だけを比較してみるとつぎのとおりである。右此諸算記者為少智拙算于新書記者也

摂津大坂 川崎屋忠兵衛

までと同じである。

刊年記は

寛永拾八年<sup>辛巳</sup>九月吉日

明暦元年<sup>乙未</sup>九月吉日



とあつて一四年の隔りがある。

正次 花押（寛永版）

重直 花押（明暦版）

も異なっている。

川崎屋忠兵衛は出版元であろう。正次と重直と名が異なるのみでなく花押も異なるところを見ると同一人とはみられない。

明暦元年の序文を見よう。

#### 新編諸算記

夫算ハ天竺にてハ世自在王之時  
よりはしまり大唐にてハ伏羲之  
時権興し我朝におゐてハ行基  
菩薩作為せり情惟に一切に渡  
り世皆算数を用ひて利徳を得  
る事多し誰か是を用ひさらん  
や故に十能六芸の中に有雖然  
世に色々の算数多かりしかとも

童蒙拙算の迷ひおほく心得かた  
きにより今八算見一を除ひて  
新に是を作れり速にて手を  
フトリ  
懷にして知に近かるへし

百川忠兵衛尉

とある。

従って古川氏一が見た新編諸算記は、今回発見された寛永十八年版の可能性が強いのである。さらに、この序文の  
⑩  
ついている新編諸算記の第九 かしらかけさんに  
⑪  
哥に

かけさんはいつれもおなし事なれば見ちかきかたをひだりニそおく  
の記載がある、古川の記述と一致しているから信憑性が強い。

さらに想像を逞しくすれば、寛永十八年以前にも新編諸算記、或いは諸算記と題する亀井算の書があったのかも知  
れぬ。塵劫記と新編塵劫記の関係のように。このことは著者名のところで再び採り上げてみることにする。

### 明暦版と寛永版との比較

現存する明暦元年本の目次を掲げてみよう。

上卷

- 第 一 大数の名の事  
第 二 小数の名の事  
第 三 かてのかず名の事  
第 四 田かずの名の事  
第 五 諸物きやうちうの事  
第 六 萬さんの覺字の事  
第 七 九九こゑの事  
第 八 龜井割九々引さん  
第 九 懸さん付頭かけ見物
- 中卷（目次には、中卷、下卷の字はない）

- 第 十 内引さんの事  
第 十一 そと引さんの事  
第 十二 金銀両かへの事  
第 十三 橋入目町割懸ル事  
第 十四 俵直さんの事  
第 十五 ねちかいさんの事

第十六 分積付さい積の事

第十七 舛目入積の事

第十八 材木ざいもくなをしの事

第十九 大工作料くさくりようの事

第二十 こミさけさん事

第二十一 ひわたまわしの事

第二十二 竹人足しわけ仕分の事

第二十三 ふき板積いたさん事

第二十四 検地けんちさんの事

第二十五 ちぎやう物成の事

第二十六 兩村の高物成以割事

第二十七 高上たか中下物成割付事

第二十八 田舎間いなかま京間ニ直ス事

第二十九 たミのべちづめの事

下卷（上は明暦元年版を、カッコ内は寛永版の条目を示しておく）

第 卅 萬にはくおく事（萬ニはく積さん）

第卅一 大豆塩糰まんしこうくさんの事（味噌焼算）

第卅二 入子算口伝知（入子さん）

第卅三 杉はへ俵数ヲ知（杉さん）

第卅四 船賃付分ヲ知（船賃仕分之事）

第卅五 買物本銀ニ割付知（買物本銀ニ割懸事）

第卅六 ⑬斤目の仕分ヲ知（斤目仕分さんの事）

第卅七 浜出し道法仕分知（浜いたしさん）

第卅八 万利足算知（落丁）

第卅九 堀普請算知（ほりふしんさんの事）

第四十 提築坪ヲ知（つゝミはくじやかご積事）

第四十一 石垣栗石知（石垣さんの事）

第四十二 開平法口伝知（開平法口伝知ル）

第四十三 開平円法ヲ知（開平円法知ル）

第四十四 開立法口伝知（開立法口伝知ル）

第四十五 極意算ヲ知（極意算知）

第四十六 ⑭薄にて九よう成ニ作

第四十七 萬当物ヲ知

以上

下巻の対比で明らかのように、条目の名が異なるのである。

さらに面白いことは、明暦三年版、山田市郎兵衛（下平蔵書本）下巻と、寛永版のものの条目がつぎの条目以外  
は同じであることである。

第卅六 斤目分さんの事

第卅八 萬利足算用事

第四十 提はくじやかこ積事

第四十五 極意算知ル

推測してみよう。

寛永版の再版が明暦元年版であろう。（巻末の記載方法が同じである）

寛永版、正保二年版、明暦元年版、明暦三年版の何れも版を新しくしたものであろう。

一応この程度にしておく。

### 著者について

現存の新編諸算記、明暦元年版には、

序文に 百川忠兵衛尉

巻末に 重直 花押

とあり、寛永十八年版には

巻末に 正次 花押

がある。

前にも述べたように、

1 山本格安「遺塵算法」一七四二年では著者を百川氏と記している。

2 古川氏一「算話随筆」では百川正次著。

3 石黒信由「開板算法書籍目録」では大阪百川忠兵衛。

4 福田理軒「算法玉手箱」では佐渡百川忠兵衛。

5 川北朝鄰「本朝算家小伝」一八九〇年では亀井津平。

6 遠藤利貞「大日本数学史」一八九六年では百川正次（治兵衛と称す）。

7 三上義夫は「亀井算攷」では

百川忠兵衛又は百川正次であつたらしい。この百川忠兵衛又正次は佐渡に居つた百川治兵衛と別人ではあるまい。

8 林鶴一は「和算研究集録」一九三七年で

百川正次、忠兵衛とあり又治兵衛といわる。

と述べている。

どうしてこのようにいろいろの説が出てきたのであろうか。その原因を探てみると、それぞれの学者が、それぞれの史料を用いて推測しているからである。

それでは、その資料を年代順に正しく記してみることにしよう。<sup>15)</sup>

1 百川治兵衛の書状 寛永六年（一六二九）

この免許状は現在その存否が明らかでないが、萩野由之博士が蔵しておられた写真二葉と原板が萩野文庫（佐渡高等学校）にあり、現物をトレースしたと思われるもの（縦約一七・五糎、横約二八・三糎）もあるという。<sup>16)</sup>

此佐渡国河原田河崎平六殿我等弟子候間此

一札改互ニ算道不殘可在相伝者也

寛永六曆

十月九日

百川治兵衛 花押

弟子衆中

金子は更にこの書状は免許状と呼ぶよりもむしろ弟子状と呼ぶ方が妥当であると述べられている。<sup>17)</sup>

2 百川治兵衛が寛永七年に佐渡にいたことを示した資料

二つの史料がある。

ア 「佐渡年代記」卷二 寛永七年の条に<sup>18)</sup>

越中の国より百川治兵衛と云ふ算術者来りて柴町泉屋多兵と云ふ者が家に寄宿し算学を弘む



イ「佐渡風土記二」寛永十五年の条に、寛永七年の免許状のことが記されている。この文献は重要なものだから、岩木墳文庫蔵の「佐渡風土記」から正しい原文を示そう。<sup>19)</sup>

寛永十五年戊寅年

一、寅九月百川忠兵衛越後於新潟ニ死 忌

日廿四日又ハ廿七日<sub>ニ</sub>云 改名九也

此者当国にて切支丹之儀ニ付牢者被仰付

弟子共訴訟ニ付出牢 十路盤治兵衛<sub>ニ</sub>云

百川の水上しらすはてもなし かそふる

道のあらんかきりは

此者寛永七年越中国山下かちか沢より当

国江来ル 治兵衛於当国柴町泉や多兵衛二代

兵九郎ニ算道之免許状左ニ記ス

此佐渡国相川ニ而中野兵九郎殿我等弟子ニ

候間此一札改互算道不殘可有相伝者也

寛永十年十月五日 百川治兵衛 花押

弟子衆中

酉二月 十四日ニ以前之九也五拾四歳ニ而

相伝

一、曲尺卷寸火縄百老筋

百川忠兵衛弟子

又三郎 新吉 右衛門九郎 彦助 喜藏

佐太郎 源次郎 仁藏 太郎助 市藏 権三

郎 与十郎 藤松 長藏 長吉 仁兵衛 孫

太郎 床屋町仁藏

ノ拾八人

右中野兵九郎兵法ニ達シ寛永十五年四月難

波藤兵衛長家より免許状兵九郎子孫柴町泉屋

六郎兵衛方ニ有之。

以上、二つの史料を示したが、注意深い読者は両書の矛盾に気づかれたかも知れぬ、

佐渡年代記 柴町 泉屋多兵

佐渡風土記 柴町 泉や多兵衛

これは後者が正しいと思われる。

なお金子勉は「佐渡風土記」は萩野由之博士の蔵書を集めた萩野文庫（或いは舟崎文庫）に三種類程あるが、この何れにも寛永十五年の条に百川の記事はない。としている。従って金子はこの書を「佐渡風土記（岩木文庫蔵）」または「岩木風土記」と略称している。

3 百川治兵衛の書状 寛永十年（一六三三）

前記「岩木風土記」で知れる。寛永六年の書状とほとんど同一であるが、可<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>が可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>に変わっている。

4 百川治兵衛の書状 寛永十二年（一六三五）

金子の「亀井算研究ノート(1)」で明らかにされた文献で、氏が佐渡の史家、橋正隆氏から教えられ、昭和三五年六月、越後今町名主善之助の日記「巳酉随筆」一一四巻の「佐渡の志満」（新潟県立図書館〈新潟市〉）に載った文面に句読点をつけたものをつぎに示すと、

当国于今百川算なりやと問、然りと答、

百川ハ何れの人なりやと問、知らず、我類中夷町磯野牛之助が方に百川治兵衛といふ人の算術免許の状あり、寛永十二年とミゆれば古き伝来なり。とかたる。

これは巳酉（嘉永二年、一八四八）八月二十四日、夷（現在の両津市夷）の小松屋という宿屋で、北方村（現在の新穂村北方）の山王神職本間河内と名主善之助との問答の一節を善之助が文にしたもので、百川治兵衛の算術の免許状のあったことを示したものである。

5 百川治兵衛の入牢

新発見の『諸算記』寛永版（鈴木）

「佐渡年代記」の寛永十五年のところに、

算術者百川治兵衛切支丹の類族の聞えありて牢舎せしむる処弟子証人に立つに依て免す

の記載があるのと、前記のように「岩木風土記」に、

此者当国にて切支丹の儀に付牢舎被仰付弟子共訴訟に付出牢十路盤治兵衛共云。

とあることから、信用してもよいものと思われるのである。

6 百川忠兵衛死亡の記録 寛永十五年「岩木風土記」に記されているように、

寛永十五年戊寅年の九月二十四日から二十七日に新潟で死んだこと。

改名して百川九也、

十路盤治兵衛とも呼ばれたこと。

が明らかにされている。

金子勉はさらに、著者や成立年代は明らかでないがとしてつぎの文献を示された。<sup>29)</sup>

『相川志』百工の部

“算術”の項に、

“慶長元和ノ比マテ算術ノ達人アルヲ聞カス”

とあり、水学宗甫をはじめ二人の姓名、職業、師弟関係が記されており、

百川忠兵衛 寛永七年越中山下鍛冶ヶ沢ヨリ来ル 弟子多シ 同十五寅九月廿七日卒

中野兵九郎 忠兵衛ノ高弟ナリ

川端完仙 米屋町々人文右エ門師也 百川流

以上の文献と、元和八年（一六二二年）に書かれた「諸勘分物」の第二巻奥書

元和八壬  
戌曆

貳月三日

百川治兵衛 花押

弟子衆中

さらに、田原嘉明の「新刊算法記」承応元年（一六五二）巻末に

“当代算法の祖師 嵯峨の吉田 佐渡の百川 此かたがたをさしおき 云云”と、

村瀬義益の「算法勿憚改」寛文一三年（一六七三）に、

“野夫竹馬春風の比より此術に志、生国佐州において百川の流を汲といへども、勘智浅ふして算淵の底に不得至、ひたすら早算の所作他に勝ればやとのみ心かけ、朝暮進退乗除を事とせり、其後武陽江府に有て、磯村氏吉徳を師と頼、難算の好示を請、愚勘の斧をといて算綾を縫べき針になさん事を思へり”などの文献を示された。

各人の主張を記してみることしよう。

1 明暦元年版の「新編諸算記」の序文が、正保二年の「亀井算」と同じ内容だったのであるとして、諸算記の著者を百川忠兵衛とした。（石黒信由と福田理軒）。ただし石黒は忠兵衛を大阪の人とし、福田は佐渡の人とした。

2 寛永版の巻末に正次と記されていることから百川正次の著とした。（古川氏一）

3 高橋栄蔵の「亀井算法」（一八七九年）の巻首にある亀井算の起源の記載から、亀井津平の者とした。（川北朝鄰）<sup>②①</sup>

4 古川の「算話随筆」から百川正次の著とした（遠藤利貞）。ただし遠藤が、正次を治兵衛と同一人物とした理由は明らかでない。

5 以上の文献を綜合して正次、忠兵衛、治兵衛を同一人とし、京都の人か大阪の人が明らかでないとした。（林

鶴一）

6 「諸勘分物」の存在、寛永六年の書状、佐渡年代記、佐渡風土記の記載から、忠兵衛と正次、治兵衛を同一人とした。（三上義夫）

と考えてよい。私の結論を述べてみよう。

## 結 論

今回発見された文献を参照して結論をつけることにしたいが、その前に簡単な年表を掲げてみる。

年 号	西 暦	文 献	宛 名	人 名 など
元和 八	一六二二	「諸勘分物」第二卷	弟子衆中	百川治兵衛 花押
寛永 六	一六二九	河原田、河崎平六	弟子衆中	百川治兵衛 花押
寛永 七	一六三〇	「佐渡年代記」卷二		百川治兵衛越中より来る。
〃	〃	〃		柴町泉屋多兵に寄宿。
〃	〃	「佐渡風土記」二 (寛永十五年のところに)		百川治兵衛越中山下かちか沢より来る。
寛永 十	一六三三	「佐渡風土記」二 相川、中野兵九郎	筆書 弟子衆中	百川治兵衛 花押
寛永十二	一六三五	「已酉隨筆」		百川治兵衛の免許状ありと。
寛永十五	一六三八	「佐渡風土記」		百川治兵衛切支丹の類族で入牢、弟子証人に 立ち出牢。
〃	〃	「佐渡年代記」		忠兵衛(治兵衛ともいう)切支丹で入牢、弟 子訴訟の後出牢。
〃	〃	「佐渡風土記」「相川志」		百川忠兵衛九月新潟死。
寛永十八	一六四一	「諸算記」下巻現存	刊本	正次 花押(巻末)
正保 二	一六四五	亀井算 三巻	刊本	佐渡 百川忠兵衛(算法玉手箱による)
明暦 元	一六五五	「新編諸算記」三巻 現存	刊本	百川忠兵衛(序文) 重直 花押(巻末)
明暦 三	一六五七	「新編亀井諸算記」三巻〃	刊本	田中文内梓行
〃	〃	「新板亀井諸算記」三巻〃	刊本	山田市郎兵衛板

年表と前に述べたことから推察して、

1 寛永版と、現存しない正保版と、明暦元年版の出版されたのは大阪で出版元は川崎屋忠兵衛。

2 寛永版の書名は巻末に「諸算記」とだけしか記されていないから、「新編諸算記」であったのか「亀井諸算記」であったのか明らかでないが、「新編諸算記」らしい。明暦元年版がそうだし、目次のところが、

しんへんさん記 上巻

として、第一条から第四十七条までを記しているからである。

3 発見された寛永版の「諸算記」の柱が下巻となっているのだから三巻本であったことは確実である。「日本古典全集」古代数学集上の解題に「亀井算二巻、正保二年の印行」とあるのは誤りで、山本格安が「遺塵算法」の中で、亀井算記一巻としているのは、目次に上巻とだけあって第一条から第四十七条まで続いているのに惑わされ、実際には上巻、中巻、下巻の三巻建になっているのを誤ったか、合冊されて一冊だったからであろう。

遠藤利貞、林鶴一が共に二巻としているのは合点できない。

4 新発見の「諸算記」の巻末に、

正次 花押

がある。これは問題を含んでいる。

百川治兵衛の名で元和八年に諸勘分物を作り、寛永六年には佐渡で河崎平六の書状があり、翌七年には柴町の泉屋多兵衛の家におり、寛永十年には中野兵九郎の書状があり、寛永十二年にも磯野牛之助家に書状を残している。百川忠兵衛という別名があり、九也と改名しているが、寛永十五年九月二十七日に死んでいる。

ここまではそのまま認めてよからう。



正次を百川忠兵衛（治兵衛、九也）と同一人物とすると、忠兵衛は寛永十八年まで生きていたことになってしまふ。なんとなれば、寛永十八年版の巻末に正次 花押があるからである。

花押は捺印の代用である。

正次の花押がある以上、正次は寛永十八年まで生きていて、自署捺印したことになる。ところが、佐渡年代記や佐渡風土記では正次と同一人物とみられる忠兵衛は寛永十五年（三年前）に死んでいるのである。

だから問題なのである。

平山博士は昭和六十一年十一月十四日付の私信で、

正次 花押

重直 花押

とあるのを、

“書肆 川崎屋忠兵衛正次”

“川崎屋忠兵衛重直（正次の跡をついだ）”

と考えたら如何であろう。

と蘊蓄ある文を書かれているが、この時代の出版元が、そういう名を残し、花押を添えたかどうか私にはわからない。

私としては、

治兵衛、忠兵衛、九也は同一人物。

新発見の『諸算記』寛永版（鈴木）

正次、重直は忠兵衛の亀井算を伝えた人物である。つまり弟子が、忠兵衛の序文を巻頭に入れて、後に大阪で書肆川崎屋忠兵衛に出版させた。

と考えるのである。<sup>22)</sup>

## 注

- ① 「新編諸算記の研究」「珠算春秋」九号 全国珠算教育連盟発行 昭和三四年四月。
- ② 2の東北大学本、日本大学蔵の2と同じものであろう。
- ③ 「三重県沖森書店、昭和一七年四月 古書目録五六号に「新編さん記亀井算法、寛文頃版上中下合本、下巻少許欠一冊」というものがある。東京理科大学はこれを購入したものらしい」と神田茂は述べている。
- ④ 題簽不明
- ⑤ 「算法玉手箱」福田理軒 明治一二年刊に「參兩録 承応二年」とあるが初版本は現存しない。
- ⑥ 石黒信由 一八三六年 七七歳没
- ⑦ 亀井津平については改めて論ずる予定である。
- ⑧ この説は誤りである。乘法は「かしらがけ」（現在この計算法を頭乘法と呼んでいる）に依っている。重能の乘法というのは、光由の乘法（塵劫記は尾乘法を採用している）であろう。
- ⑨ 三上博士は正保二年版を見ておられなかった。
- ⑩ 東北大学本五一丁表、日本本の「新板亀井諸算記」四七丁表にある。
- ⑪ 神田茂が「和算曆学史ノート」（79）一九六一年十月二十九日で

「古川氏一は算話隨筆の中で

新編諸算記上之巻寛永年中百川正次著として「かけさんは……」の歌をかいている。この歌は明暦版には見えないものであるから明暦とは内容の異った新編諸算記という題で、百川正次と署名のある本があったのであらうと考うべきである。資料が少いから疑わしいとしても否定することはできない。しかし寛永年中というのは疑わしいので、亀井算の初版は一応正保

二年と見てよいと思う」と述べているが、「かけさんは……」の歌は明暦元年のものにも、明暦三年版にも載っているから神田の間違いである。

⑫ 明治前日本数学史 第一巻 岩波書店 二五一ページに「置物」とあるは誤りである。

⑬ 同じく「升目」とあるが誤りである。

⑭ 同じく「九より」とあるが誤りである。

⑮ 正しく記すということが困難な事業であったが、佐渡の金子勉氏が正確なものを「亀井算研究ノート」一―五で発表された。「月刊珠算界」一三二、一三四、一三五、一四三、一四九号の五三頁に及ぶ一九五三年以降の発表で、もっとも信頼のおけるものであった。従来の孫引きの弊がこのときから改められた。

⑯ 亀井算研究ノート(1) 金子 勉

兵六、等門弟または等弟子候間、門弟候間可有などと諸書にあるのは誤りで、平六、我等弟子候間が正しい。とされた。兄玉明人は、此一札改互ニを「此一札改年ニ」と読んでいる。

⑰ この者（河崎平六）を私（治兵衛）の弟子に加えたから、兄弟子である君たち（弟子衆中）は（君たちの知っている）算道を残らず相伝えてやってもよろしい」と

と解釈すべきだと云うのである。理由は、

(1) 文中に免許を意味する文言が全くない。

(2) 免許の項目（目録）がない。

(3) 宛名が本人宛でなく「弟子衆中」である。

(4) 算道不殘可在相伝者也は「算道残らず相伝うべき者也」即ち「算道残らず相伝うべき有資格者である」ので「相伝えた」とはとれない。

だから、算道に関する弟子状といい改めることにしようと思う。「亀井算研究ノート(5)」とある。

⑱ 炭木嶺「佐渡の百川流と新潟の亀井算」によった。「亀井算研究ノート(5)」がその全文を掲載している。

⑲ 岩木、三上博士、藤原博士の論文の孫引きによって誤写される場合が多い。例えば免許状の年月日、忠兵衛の弟子、以前之九也が如前九也、酉が再と三上、藤原博士の論文にもミスプリントがある。

忠兵衛の弟子は又三郎の外に十七名があつたのであり、弟子だけで十八名なのである。諸書に「又三郎外十六名」とか「又三郎（外十六名省ク）」とあるのは誤りである。

と金子は述べている。孫引きの恐ろしさを教えている。

②① 「亀井算研究ノート(5)」『月刊 珠算界』一四九号。

②② 後日改めて論及したい。

②③ 以上の結論は、かつて私が「数学史研究」四三号に、「百川治兵衛と忠兵衛」と題して一九六九年に発表した結論を大きく修正するものである。二八頁から二九頁にかけて出したものは「珠算春秋」第九号 一九五九年四月 全同珠算教育連盟発行「新編諸算記の研究」で、

- (1) 百川治兵衛と百川忠兵衛は別人であろう。百川正次といっているものは資料がないか否定すべきであろう。
- (2) 正保二年に初版が出たものであろう。書名は「亀井諸算記」であつたろう。
- (3) 著者は百川忠兵衛であり、百川治兵衛の教えを受けた人であろう。
- (4) 明暦元年に「新編諸算記」として再版を発行したものであろう。
- (5) 百川忠兵衛重直というのが正しかろう。
- (6) 明暦三年に三版を出したものであろう。
- (7) 「参両録」の著者、榎並和澄の見たのは正保二年のものであつたろう。
- (8) 正保二年、明暦元年、明暦三年版ともに三巻であり、内容は太差無いものであつたろう。とし、「百川治兵衛と百川忠兵衛」では、
- (1) 百川正次といっているものは、古川の「算語随筆」以外にないから否定すべきであろう。
- (2) 「亀井諸算記」の下に「亀井算」を追加。
- (3) 「佐渡風土記」（舟木文庫蔵）の百川忠兵衛とあるところは治兵衛が正しい。
- (4) 「算語随筆」の「寛永年中 百川正次著は間違ひと思ふ」と記したのだが、寛永版の発見で本論文にあるように大修正を余儀なくされた。改めて推論の恐ろしさを味わっている。